



ちくじつこうかじじつほ しゆしゆんすいじひつ  
 逐日功課自実簿 朱舜水自筆

寛文8年(1668)

縦25.8cm 横18.3cm

日本の国民的長寿番組の一つに「水戸黄門」がある。ドラマの終盤で決め台詞とともに印籠を取り出すのは、主として格さんである。

実はこの格さんに、実在したモデルのいたことをご存じだろうか。

その人は安積澹泊（二六五六～一七三七）、名を覚という。

彼は水戸城下に生まれ、十歳で江戸へ出て、二代藩主光圀が招聘した明末の亡命学者朱舜水（二六〇〇～八二二）の許でおよそ三年間学ぶ。

舜水は、「文武全才第一」とその才能をうたわれた傑物。十二度にわたる仕官の誘いを

正徳貳年壬辰臘月穀旦

門生安積覺百拜謹跋

固辞し、明朝の復興運動に身を捧げた。援助を求めて七度目の来日をするも、夢破れたため長崎に留まっていたところ、高評を聞きつけた光圀が賓客として迎え入れたのであった。

本書には、舜水が寛文八年（二六六八）三月十一日から九月十五日にかけて澹泊へ与えた日々の課業が記されている。こうした帳面は、澹泊以外の教え子には作られておらず、澹泊へ多大な期待をかけていたことが窺われる。

徹底的な暗誦を旨とした指導は、毎月一日と十五日の二度の復習を重視。当該期間の主な学習内容は「小学」であったが、他に「論語」などへも句読を点して親しく口授している。唐音（中国音）による教授法は、粹然たる漢文作成には大いに有効であった。後年、師の学風を受け継いだ澹泊は、光圀が企画した修史事業である『大日本史』の編纂に主導的役割を果たす人物となった。

（天理図書館 三村 勤）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>  
平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）  
2月15日～24日、28日は閉館。  
（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）